

彫刻「はる」

日本橋三井タワー、アトリウム彫刻について

江戸から明治へ、さらに大正、昭和から平成の時代へと受け継がれてきた四百年。そこに生き、仕事し、伝統を築いてきた先達たち——。このプロジェクトに携わってきた過去五年の間に、深い感銘を覚えたのは、途切れることなく受け継がれてきた伝統の連続性だった。伝統の豊かさは、無限の「生命の躍動 (élan vital)」に基づくとの思いを強くした。この「生命の躍動」は、伝統の形の中にあって絶えず新しい状況に順応し、新しい価値を創造し続ける。つまり、自由と変化が伝統に包括されているということだ。そこで私が創りたいと思うのは、沸き上がるような強い意志をもった、生命の原動力ともいうべきものを喚起する彫刻である。それは、エネルギーに満ち満ちていると同時に静かなパブリックスペースとなり、江戸時代から今の自分の世界へ飛躍し、時代を超えた人々の営みへ、また、東京の中心にありながら人々がそこへ帰ってきたいと思えるような公共の場所へ人々を誘う彫刻である。こうした私の気持ちが作品「はる」に表現されていたらと、ねがう。

これは、未来に向かって開く一対の作品であり、ダイナミックである。二体の間に出来る空間が三つ目の彫刻となり、全体を曖昧でなく、示唆に富むものにしていく。たっぷりした重量感を伴いながら、天空に舞い上がり、どこまでも遮るものもない天空に自由に飛んで行く、無限を感じる。しかも生き生きとして、見る角度によって多様に変化する。書であり、舞であり、自由である。石が美しいメヌエットを踊るとは誰も思わないだろう。経験と伝統の重さが最も即興的な書や強烈なステップの礎となっていることを目にして、人は驚くだろうか。

彫刻「はる」の基調にあるものは、開放性(Openness)と、オリジナリティー、つまり、どこにでも見られるものではない創造性につながる力強さと、安定感である。表面が波打ち、平面が捻じれ、また石が競りあがり、立ち上がり、舞い上がる。微妙であり、いやそれほど微妙でもないかもしれない驚きである。この作品が永く続くもの、変化するもの、生命力に満ちたもの、高揚するもの、自由であるもの、未来に向かって開かれているもの、現在において、過去の時と無限が一つになったものを、見る人のうちに喚起することを希う。この彫刻は、私が日本橋三井タワーへ捧げる Agalmata (捧げ物) である。

齊藤 智

Satio Satoshi 2005. All rights reserved